3．名古屋大学に於ける教育実習国語科事前指導の実践

持　山　育　央

【抄録】毎年、年度当初に本学教職課程委員会が主催して行われる「教育実習事前指導」において、「国語科指導上の留意点」を初めて担当することになった。事前指導で何を講義するべきなのか、自分なりに試行錯誤した。そして、自分自身の教育実習の反省と、２年間の授業実践の中で感じたことをもとに、国語科の授業を行う上での心構えを抽象的に講義した実践記録である。

【キーワード】

１．はじめに

名古屋大学では、新年度当初に本学の教職課程委員会が「教育実習事前指導」を実施している。午前９時から午後４時20分までのまる１日を費やして行われる事前指導では、午前中にオリエンテーション・講演が行われ、午後には映画「中学校教諭への道」を挟んで教育学部附属学校教諭による講義が行われる。本年度は「学級経営について」「生徒指導について」の講義ののち、各教科に分かれて「教科指導上の留意点」が国語・社会・数学・理科・英語の５教科７名の教諭によって話された。私は本年度、はじめて「国語科指導上の留意点」を講義することになった。短い時間ではあったが、その実践をまとめてみたいと思う。

２．事前指導の実践

本年度、国語科の教育実習事前指導は、本校教諭斉藤・持山が担当することとなった。２人で１時間の講義を担当する。これから教育実習に向かう学生にとって「何が為になるか」という観点から、次の事柄を選んで私の持ち時間30分の講義をすることにした。講義内容を以下①～⑦に列挙してみる。なお、(資料１～４）は、講義の資料として配布したものである。

①導入【自分の教育実習の記録より】

私自身が、実習生として教育実習を終えた直後の「後輩の実習生に伝える事項」が、教育実習記録にあった。そのままにしておいては、決して人目に触れることのない文章だ。しかし、後輩の実習生の前で話をする機会を得た好運により、実際に伝えることができた。これは、主観的な私見に過ぎないが、参考になる部分があればと思い話すことにする。

「後輩の実習生に伝える事項欄（教育実習記録より）

教育実習へ行く実習生には、大きく分けて２種類があります。一つは教師になりたい者、もう一つは、教師になる気がない者です。前者は教師になる上で色々な不安を抱えているので、実習に一生懸命取り組むに決まっています。しかし、後者も案外（意外に）がんばっていました。私は一応前者の部類でしたが、私なんかよりもずっと真剣に取り組んでいた後者の方々がたくさんいました。少なくとも「いいかげん」な実習生は、名大附属にはいませんでした。だから、教育実習を軽く考えている人たちは、改めた方がよいと思います。(でも、案外雰囲気で頑張れてしまうものです。)

二週間はとても短いです。その間、自分の全てをなげうって、実習に没頭しましょう。生徒はとても可愛いです。その生徒の中に、何か一つ思い出を残せたなら幸いだと思います。そして、自分の心の中には、たくさんの思い出をつくりましょう。

平成２年６月27日」

後半の「自分の全てをなげうって」という部分を強調した。本校に来る実習生も、教員志望の者が減少している。しかし、教員志望であろうがなかろうが、教育実習の２週間では全力で臨んでもらいたい。

②教師（実習生）としての自分の原点

ここからの３問（②③④）は、まず、聴講生に自分の考えを「１分間で１行」にまとめてもらい、その考えを聞きながら進行していくことにした。

「教師としての自分の原点」とは、「どうして教師になろうと思ったか。」もしくは「どうして教育実習に行こうと思ったのか。」ということである。

はじめの質問ということもあり、回答はスムーズには出てこなかった。どうにか出てきた回答は「昔からの夢だったから。」「良い先生に巡り会ったから。」と、抽象的なものばかりだった。「部活動を続けたいから。」

「人と接するのが好きだから。」など、自分が教師を目指そうと思うに至った出発点は、具体的に整理しておくと良い。それが、そのまま教育実習の心構えになる。中には、遠慮がちにではあるが「教師になるつもりはないが、資格を取るために。」という意見もあり、少し落胆させられた。

③国語科教師（国語科実習生）としての自分の原点

これは「どうして国語科なのか。」ということである。「国語が好きだから。」「国語が得意だから。」という意見が圧倒的に多かった。これも②と同様に、より具体的に整理しておくと良いと思い、私自身の国語科教師としての原点を話すことにした。私の国語教師としての原点は、中学３年の国語の授業での「志賀直哉『宿かりの死』」（資料１）の授業との出会いであった。具体的な説明は避けるが、国語教師を目指す者は誰にも、感動する作品との出会いが少なからずあるのではないだろうか。その時の状況、何を感じ何に感動したのかを、思い出しておくと良い。

④国語で何を教えるか

これは難しい問題で、私自身も明確な解答を持ち合わせていない。よって、自分自身の２年間の教員経験の中から得た、「国語で何を教えるか」を考える上でヒントになると思われることを、いくつか述べることにする。

まず、自分がこれまでの国語の授業で「何を学んで来たか」を考えるとよい。高等学校・中学校・小学校、場合によっては幼稚園・保育園にまで遡って考えてみてもよい。教科書やノートを見直してみるのも良いだろう。

次に、国語（日本語）を教えているという自覚を忘れてはならない。「ことば」を教えているという責任である。国語の教師は、生徒に読む・書く・聞く・話す力をつける責任がある。授業中に板書する文字、授業中の言葉遣い、配布プリントの文字などにも細心の注意を払わなければならない。

国語の授業は、「ことば」を教えるに留まらないところが楽しいところだ。ことば（文章や会話）を通して生徒に考えさせる。それが、他人の気持ちを考えることになり、「思いやり」を育てることにもつながるのではないか。つまり、人間性を豊かにする人間教育にもつながっていく可能性を持っている。

同様に、国語の授業は幾らでも広がり得る可能性を持っている。『同和教育研究集録』の中に『魯迅作・竹内好訳「故郷」』（資料４）の中学３年の実践例が紹介されている。教材の目標として「不合理な身分差が深く人間を傷つけ、人と人との心の中に厚い壁を築いてしまうことや、その壁を取り除こうとすることの厳しさと大切さを主人公の生き方から学びとることができる。そして、人と人とが心から打ち解け合える社会の実現を目指そうとする意欲を持つことができる。」とある。文学作品の背後に同和教育の視点を踏まえて読み取らせることも可能なのである。

日常に出会うどんなものでも国語の教材になり得るし、国語の教材はどんな方向付けもできるのである。

⑤授業への心構え

まず、仮免許証を与えられた教師としての自覚が大切である。「国語科教師」としての責任を感じながら授業に臨んでもらいたい。授業の50分は生徒の大切な時間である。

教材研究から授業案の作成にあたっての注意事項を述べる。「教材研究」は、「授業の命」と言ってもよい。教材の可能性を充分に探り出さなければならない。自分に合った好きになれる教材では、生徒に伝えたいことを見つけ出すことは容易である。しかし、それに満足することなく更に探求することが大切である。また、自分に合わない好きになれない教材から何を生徒に伝えるかが重要である。例えば、『伊勢物語』第24段「三年帰らざりし男」（資料２）と、『徒然草』第30段「人の亡きあとばかり」（資料３）を比較してみる。古文としては共通するが、内容の全くちがう二つの文章から、それぞれ自分が生徒に伝えたいことを探り出してもらいたいと思う。

次に、自分に与えられた授業時間全体の見通しを考えなければならない。自分は、教材のどれだけを何時間で担当するのか。その時間内で、生徒に何を伝えるかを綿密に計画し実践することは大切である。ここで、自分の実習の失敗談を紹介する。高校２年生の現代文で、教材は三木卓「はるかな町～介添え人」である。

『４時間中の３時間目

今日の授業は、授業全体の流れの中での位置づけが難しい内容だった。先生には「このようなことは最後にまわした方が良い。」と言われた。私としては、授業中、ポカンとしている生徒に少しでも目的を持って授業を受けてもらいたかったので、焦って「どうして小説を読むのか。」ということを、自分なりに言ったのだが、もっと冷静に見通しを立てるべきだった。感情に左右されてはいけない。』

私の力がなかったためか、授業に集中できていない生徒が何人か目につき、「このままではいけない」という感情から、国語の授業を受ける意味について時間を割いて話した。しかしながら、短い時間と力量の劣らなさから到底伝わるはずもなく、また、授業全体の計画を崩す結果となってしまった。

授業の中では、生徒にできるだけ活動させたい。現代文にしても古文漢文にしてもまずは言語抵抗を取り除くことが大切である。そして、比較的言語抵抗の少ない現代文では「考えさせる」こと、言語抵抗の大きい古文漢文では教科書の脚注や辞書などを使って「働かせる」ことを念頭におくとよい。

最後に、自分が授業をしていく上で、自信を持ってできることを積極的に押し進めていくと良いと思う。自分の得意なことを授業の中で実践するということである。大きな声で朗読する、大きくてきれいな文字で板書するなど、自分のできることを実行することが、授業のリズムをつかむことにもつながる。

⑥教科指導から離れて

学校（中学校・高等学校）生活で、授業以外の部分が占める割合は意外に大きいと思われる。休み時間や放課後に、授業ではみられない生徒の素顔が現れるといっても過言ではない。それ故に、授業以外の時間は重要である。実習期間中は、教科の教材研究にとかく縛られがちだが、生徒がいなくてもできることは、生徒が帰宅してからすることにして、生徒がいなくてはできないことを下校時間まで精一杯行ってはどうだろうか。

⑦実習記録【授業の反省】より

その他、私の教育実習での８時間の授業の反省を紹介した。これから実習に向かう聴講生に、私と同じ失敗を繰り返すことがないようにと願ってプリントにしたものである。少しでも参考になればと思う。

３．反省

国語科の教育実習事前指導を初めて担当することになって、自分が初めて教壇に立ったときのことを思い出した。泳げない人間が、大海原に投げ出されたかのごとき心境であった。それと同じ心境を、これから教育実習に行く学生たちは味わうのであろう。そして、何よりも講義をしている自分自身が再びその心境になっていることに気が付いた。何とも複雑な心境であった。

自分の経験をもとに私見を話した些細な講義で、「事前指導」になったかどうかは疑問である。国語科の教員になって２年が経過した今、自分自身が授業の中で何を目指しているのかを考えると、やはりその根源は自分が受けてきた国語の授業にあると思った。それぞれが持っている授業のイメージは、同様に培われてきたものにちがいない。そのイメージが良いものであっても悪いものであっても、それを整理しておくことは、教壇に立つときに必ず役に立つはずである。

名古屋大学のように、短期で実施する教育実習事前指導がどうあるべきなのか、今後も課題として探求していきたいと思う。

４．資料

（資料１）志賀直哉「宿かりの死」　三省堂（教科書）
（資料２）『伊勢物語』第２４段「三年帰らざりし男」右文書院（教科書）
（資料３）『徒然草』第３０段「人の亡きあとばかり」右文書院（教科書）
（資料４）国語科学習指導案　「故郷」（魯迅作、竹内好訳）　1991　兵庫教育大学学校教育学部附属中学校『同和教育研究集録』